

## B—4 皮革の染色性と、そのクリーニングの研究 (第2報)

### —タンニンなめし皮の変退色防止の研究—

東京家政大家政 ○卜部 澄子  
石尾 清子  
松井 正子  
荒木 博子  
本田 悦子

1. 手工芸染色で多く利用されるタンニン鞣し革は、付着しているタンニンの酸化と、染色に用いた染料の退色とが重なり、染められた最初の美しい色相が時間の経過によって目立って変化してくる。この変退色防止について試験研究をこころみた。

2. 試験材料として印度産ヤンピーを用い、酸化防止剤4種のアルコール溶液で、はけ引・浸染の方法により革を処理した。この場合処理温度の効果の差、および染色する染料との組合せなどの比較検討を行ない、これらをフェドメーターによる耐光堅ろう度、および日光堅ろう度試験を行ない、変退色を判定した。更に酸化防止法として行なわれている各種油脂の混合油を塗布して、効果を検討した。

3. 実験結果から防止剤使用による顕著な効果を得ることはできなかつたが、(1)防止剤による処理は革の染色前に行なうより、染色後行なう方がよい。(2)防止剤溶液は、はけ引(常温)より、加温(50°C前後)による浸漬の方が効果が良い。(3)鞣しずみの輸入革そのままより、日本でそれが再鞣しされた革の方が変退色が少ない。(4)フェドメーターによる照射と、日光照射試験では、防止剤の種類により効果が全く違う。(5)防止剤溶液濃度は5%前後がよい。濃厚、又はうすい液は効果が悪い。(6)混合油の塗布は、耐光試験、日光試験ともに良好な結果が得られるが、処理革の染色色相の鮮明度が落ち、色が汚なくなる。などの諸点を認めることができた。